

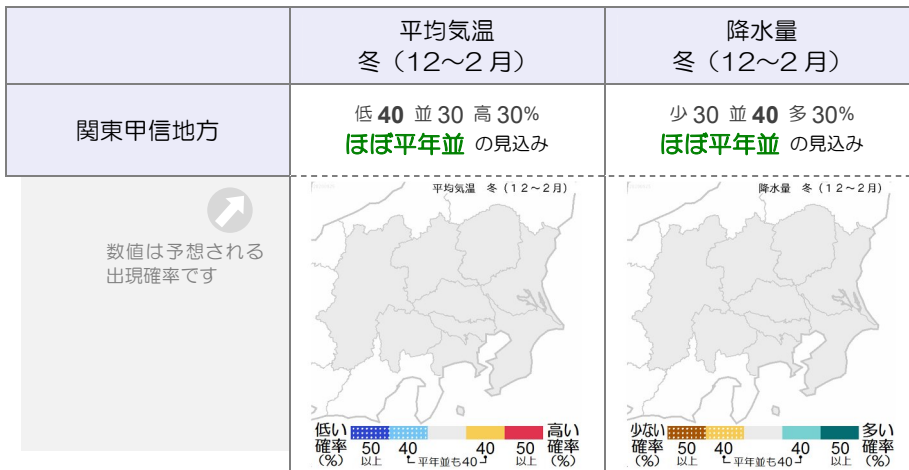
# 冬の天候の見通し 関東甲信地方 12～2月

## 予報のポイント

- 冬の気温は、ほぼ平年並の見込みです。
- 冬の降水量は、ほぼ平年並でしょう。

冬の天候に影響の大きい北極振動の予想は難しく、現時点では考慮できていませんので、予報には不確定性があります。常に最新の1か月予報等をご覧ください。

## 冬（12～2月）の平均気温・降水量



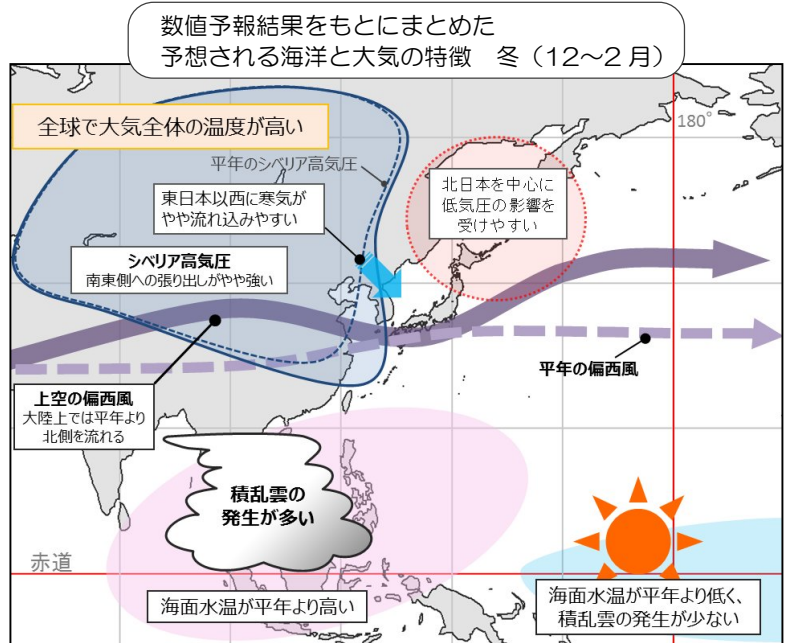
季節予報は、予測の確からしさに応じて、気温や降水量などを「低い（少ない）、平年並、高い（多い）」となる確率で表しています。「平年並」がどの程度の値になるのかについては、末尾の「参考データ（平年並の範囲）」をご覧ください。

### ● 確率予報の解説（ここでは確率予報を次のような言葉で解説しています）

出現確率（低い（少ない）：平年並：高い（多い））	解説
高い（多い）確率が50%以上 (20 : 40 : 40)	高い（多い）見込み 平年並が高い（多い）見込み
平年並の確率が50%以上 (40 : 30 : 30) (30 : 40 : 30) (30 : 30 : 40)	平年並の見込み ほぼ平年並の見込み
(40 : 40 : 20)	平年並が低い（少ない）見込み
低い（少ない）確率が50%以上	低い（少ない）見込み

## 予想される海洋と大気の特徴

- 地球温暖化の影響等により、全球で大気全体の温度が高いでしょう。
- ラニーニャ現象が続く可能性が高く、太平洋の海面水温は、中・東部赤道域では低い一方、西部熱帯域では高く積乱雲の発生が多いでしょう。
- これらの影響により、上空の偏西風は、大陸上では平年より北を流れやすく、日本付近では南に蛇行するでしょう。このため、シベリア高気圧は南東側でやや強く、東日本以西に寒気がやや流れ込みやすい見込みです。
- 一方、北日本では低気圧の影響を受けやすく、寒気の影響を受けにくい見込みです。



## 最近 10 年間の冬の特徴

年	冬の平均気温 (関東甲信地方) 平年差℃(階級)	冬の天候の特徴
2010/'11	0.4 (0)	12月末～1月末日本海側で大雪、低温
2011/'12	-0.9 (-)	冬型多く、北～西日本は3か月連続低温 最近10年間では“平成18年豪雪”に次ぐ積雪
2012/'13	-0.7 (-)	北・東・西日本で低温 北日本日本海側を中心に多雪
2013/'14	-0.3 (-)	東日本、沖縄・奄美で低温 2月に関東甲信で記録的大雪 日本海側の平地は少雪
2014/'15	-0.1 (0)	12月は全国的に強い寒気が流れ込むが、1月以降は少雪
2015/'16	1.4 (++)	冬型の気圧配置が長続きせず、全国的に高温・多雨・少雪
2016/'17	0.9 (+)	日本付近への寒気の南下が弱く、全国的に高温
2017/'18	-0.5 (-)	日本付近へ強い寒気の流れ込むことが多く、全国的に低温
2018/'19	1.1 (++)	東日本以南は寒気の南下が弱く、沖縄・奄美は記録的高温
2019/'20	2.2 (++)	日本付近への寒気の南下が弱く、全国的に高温 東・西日本は記録的暖冬

「2016/'17」は2016年12月～2017年2月のことです。  
階級 --:かなり低い -:低い 0:平年並 +:高い ++:かなり高い

## 参考データ

### ● 平年並の範囲

	平均気温冬（12～2月）	降水量冬（12～2月）
関東甲信地方	平年差：-0.1～+0.4℃	平年比：73～122%
東京	6.0～6.6℃	104.6～192.7mm

「平年並」の範囲は、同時期の過去30年間（1981～2010年）の値から統計的に求めています。30年間のデータの中で「高い（多い）」「平年並」「低い（少ない）」となるデータの数が等分になるように「平年並」の範囲を決めています。すなわち、30年間の30個のデータのうち、値が高い（多い）方から11～20番目となる10個のデータの値の範囲を、おおよそ「平年並」の範囲としています。

### ● 晴れ日数と降水日数の平年値

	12月		1月		2月	
	晴れ日数	降水日数	晴れ日数	降水日数	晴れ日数	降水日数
東京	22.5日	4.2日	22.9日	4.5日	19.1日	5.5日

「晴れ日数」は「日照時間が可照時間の40%以上」の日数であり、「降水日数」は「日降水量1mm以上」の日数です。この2つは同じ日に起こることがあるため、「晴れ日数」と「降水日数」の両方に数えられる日もあります。